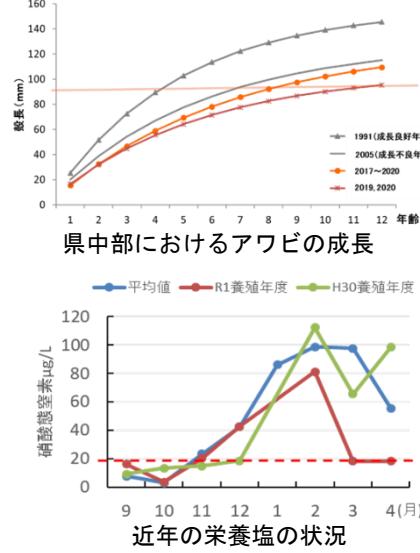
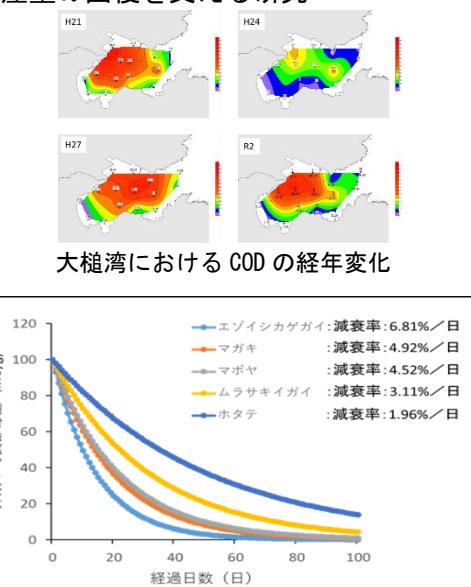


岩手県水産技術センターの試験研究に関する取り組みの状況

No.	項目	取組内容	備考																			
1	生産量回復の基礎となる研究 <p>岩手丸海洋観測による10m深水温変動 (S41～R2の55年)</p>	<p>生産量の回復を目指し、その基礎となる海洋環境等の継続的な調査と情報発信の強化に取り組む。</p> <ol style="list-style-type: none"> モニタリングの充実継続 観測機器や調査船等の定期的な維持修繕、魚類養殖の拡大に向けた漁場環境評価 現状及び将来予測の情報発信(操業・経営判断、ICT)の強化 水温、栄養塩、ホタテガイラーバ来遊等の予測、主要魚種の漁場形成・漁獲量等予測精度の向上 	<p>継続及び強化</p>																			
2	生産量の回復に関する研究 <p>魚体重と遊泳力</p> <p>数日間絶食後、再び持続遊泳力を測定した結果</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>絶食期間</th> <th>2日</th> <th>5日</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>持続遊泳力 30cm/s未満</td> <td>遊泳力</td> <td>50cm/s以上 0</td> <td>50cm/s未満 0</td> </tr> <tr> <td></td> <td>測定個体数 (合計)</td> <td>15</td> <td>13</td> </tr> <tr> <td>持続遊泳力 50cm/s以上</td> <td>遊泳力</td> <td>50cm/s以上 6</td> <td>50cm/s未満 3</td> </tr> <tr> <td></td> <td>測定個体数 (合計)</td> <td>15</td> <td>13</td> </tr> </tbody> </table> <p>高い持続遊泳力グループでは、数日間摂餌しなくとも、高強度の運動負荷に耐えられる稚魚がいる。</p> <p>遊泳力と絶食後の状況</p>		絶食期間	2日	5日	持続遊泳力 30cm/s未満	遊泳力	50cm/s以上 0	50cm/s未満 0		測定個体数 (合計)	15	13	持続遊泳力 50cm/s以上	遊泳力	50cm/s以上 6	50cm/s未満 3		測定個体数 (合計)	15	13	<p>秋サケやアワビ・ウニ等の磯根資源、養殖ワカメ等の生産量の回復を目指し、これまでの調査研究を継続するとともに新たな技術開発に取り組み、水産業普及指導員等と連携のもと、得られた成果の現場実装の進展・強化を図る。</p> <ol style="list-style-type: none"> 秋サケ資源の早期回復 <ol style="list-style-type: none"> 回帰予測技術の精度向上 幼稚魚追跡・河川回帰親魚調査の継続、新たな知見(海洋物理環境や環境DNA調査等)を加えた予測技術の検討 既存飼育放流技術の改良 <ol style="list-style-type: none"> 最適飼料の探求 アスタキサンチン添加飼料給餌による抗病性向上・遊泳力強化の再確認 大目網海中飼育効果の把握 飼育1ヶ月後に大目網への網換え(潮通し改善と小型稚魚逃避による適正密度飼育)で健苗性向上の検討 飼育放流技術の開発 <ol style="list-style-type: none"> 稚魚の特性把握砂鉄川♂と片岸川♀交配稚魚等の温度耐性試験、安家川♂追加 遊泳力強化試験の再実施砂鉄川と片岸川で有為差なしの再検証 H30年級群(H31年熊野川放流魚[砂鉄川・片岸川由来])の回帰率把握 稚魚放流情報(表面水温、動物プランクトン量)の充実 水温予測、潮流及び最新知見等の追加で狭まる適期内の放流支援 <p>健康で大型(2.0g以上)の稚魚生産、適期放流</p>
	絶食期間	2日	5日																			
持続遊泳力 30cm/s未満	遊泳力	50cm/s以上 0	50cm/s未満 0																			
	測定個体数 (合計)	15	13																			
持続遊泳力 50cm/s以上	遊泳力	50cm/s以上 6	50cm/s未満 3																			
	測定個体数 (合計)	15	13																			

	<p>2 ウニ焼け対策による磯根資源の回復及びアワビ資源の有効利用</p> <p>(1) 磯根資源の回復に向けた技術開発</p> <p>ア モニタリングの充実強化(潜水+水中ドローン活用) イ 細餌用海藻の多様化と各漁場に適した海藻の見極め ウ AI活用によるドローン撮影画像からの海藻繁茂面積の算定 エ 蓄養ウニの身溶け抑制・身入り向上技術の検討、蓄養ウニの品質評価支援</p> <p>(2) アワビ資源の有効利用に向けた技術の普及</p> <p>3 沿岸養殖漁場での海水温上昇等環境変化への対応</p> <p>(1) ワカメ養殖業 半フリー種苗供給体制の整備(県栽培協等)、育種研究(生長や高温耐性等)の推進</p> <p>(2) アサリ(高水温に強い)養殖技術の開発 生産現場で対応可能な人工種苗生産・養殖技術の確立と普及</p>	<p>飼料海藻の新たな造成技術(フリー種苗等活用)の実装、種苗供給体制の整備 3(1)</p> <p>種苗の転換誘導と供給体制整備、病虫害対策 3-1(1)</p> <p>試験地区拡大と产地化、貝毒等安全対策 3-2(1)</p>
<p>3 生産量の回復を支える研究</p> 	<p>生産量の回復を目指し、これを支える調査研究や技術開発を充実強化するとともに、情勢変化に対応した新たな課題に取り組む。</p> <p>1 病虫害対策やサーモン養殖拡大に伴う漁場環境保全対策</p> <p>(1) 既知病虫害及び新規病虫害への対応</p> <p>ア DNA分析を用いたスイクダムシ発生予察技術の検討(生工研連携) イ アマクサアメフラシの生態解明と被害軽減技術の検討</p> <p>(2) 漁場環境評価体制の強化(主要5湾の底質環境調査を通じた支援)</p> <p>2 麻痺性貝毒等の安全対策</p> <p>(1) 介類の出荷自主規制期間長期化(広域化)海域での収益確保 既存種毒量減衰率の広報強化(アウトリーチ等)とアサリの減衰率試験</p> <p>(2) 麻痺性貝毒の低毒化技術開発</p> <p>ア 新たな低毒化技術開発につながる可能性調査 底生生物(ゴカイ等)を活用したシストの発芽能減衰効果(毒化ポテンシャルを減らす)技術開発(水究機構R3~)の本県への導入及び共同研究の可能性調査</p>	<p>種転換が介類養殖生産量回復の鍵</p> <p>知見を収集しながら中長期的に対応</p>

<p>麻痺性貝毒で毒化した介類の毒量減衰率</p> <p>輸送試験時梱包</p> <p>【水産加工業者（落し身加工）】</p> <p>【食品加工業者（製品加工）】</p> <p>アンケート結果</p> <p>冷凍ホヤ 45% 味が良い 活ホヤ 55%</p> <p>冷凍ホヤ 72% 美味が強い 活ホヤ 28%</p> <p>【冷凍落し身原料】</p> <p>高鮮度イワシ（落し身から）の加工品試作</p> <p>さつま揚げ ハンバーグ</p> <p>マーボ豆腐 ミートソース</p>	<p>イ 県環境保健研究センター(毒代謝物を指標とした毒量減衰時期予測)及び大学等(毒量減衰効率の基礎研究支援)</p> <p>(3) プランクトンの警戒密度の早期設定 貝毒監視定点(12 海域 13 定点)における予測式の現場検証</p> <p>3 漁獲量が増加している魚種等の利用促進</p> <p>(1) ホヤ・サワラ等の高鮮度流通継続</p> <p>ア うま味成分分析と弾力変化試験 「うま味」と「食感」を保持する技術の検討</p> <p>イ ホヤ(福岡市)とサワラ(名古屋市)の輸送試験 産地同様の「高鮮度・食感」提供</p> <p>(2) マイワシ等の加工品試作等強化</p> <p>ア 「サンマすり身」から「マイワシ落し身」へ転換の誘導 高鮮度原料(生鮮・冷凍)からの「高鮮度落し身」製造方法の検討、加工品試作と水産加工業者への普及</p> <p>イ 水産加工業者の新商品開発の支援</p> <p>(3) 急速凍結器活用による商品開発支援 急速凍結器稼働状況の実態調査及び商品開発ニーズの把握、水産加工業者等の新商品開発の支援</p>	<p>令和4年度限り</p> <p>浜値アップ、原魚転換・利用促進の鍵</p>
--	--	---